

# 先人の知恵から

## 3

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回で3回目になる。先人の知恵を子育てに活かせればと始めたが、中々あ行が終わらない。それだけ多くの諺があり、それぞれに使われ続けてきただけの重みや、納得がある。

言葉を省略し、外来語も日本語もごちゃ混ぜになっている若者言葉。それはそれで、新しい文化だとは思ふ。でも今少し昔ながらの言葉を大事にしてみよう。スマホやパソコンでも諺は調べられる。時にはそんな諺に触れてみて欲しい。

今回は次の7つ。

- ・能<sup>あた</sup>わざるに非<sup>あら</sup>ず、為<sup>あた</sup>さざるなり
- ・有<sup>あ</sup>っても苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>、無<sup>な</sup>くても苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>
- ・虻<sup>あぶ</sup>蜂<sup>はち</sup>取<sup>と</sup>らず
- ・雨<sup>あめ</sup>だれ石<sup>いし</sup>を穿<sup>うが</sup>つ
- ・余<sup>あま</sup>り円<sup>まる</sup>きは、まろび易<sup>やす</sup>し
- ・飴<sup>あめ</sup>と鞭<sup>むち</sup>
- ・雨<sup>あめ</sup>降<sup>ふ</sup>って地<sup>ち</sup>固<sup>かた</sup>まる

### <能<sup>あた</sup>わざるに非<sup>あら</sup>ず、為<sup>あた</sup>さざるなり>

物事を実現できないのは、それが不可能だからではなく、やろうとしないからである。能力があっても実行力や意思が足りないことをいったもの。「能<sup>あた</sup>う」はできるという意。出典は「孟子」(王の王たらざるは為<sup>あた</sup>さざるなり、能<sup>あた</sup>わざるに非<sup>あら</sup>ざるなり。)より。

現代社会では、何事も簡単に諦<sup>あきら</sup>めてしまう風潮が強いように思う。正規に就職して直ぐ転職したり、フリーターになってしまう若者も多い。自分の頑張<sup>がん</sup>りが必ずしも報われるわけではないし、例え頑張<sup>がん</sup>って起業した所で成功するのはごく一部と分かっている。大企業があっけなく潰<sup>つぶ</sup>れるなど、何を信じればよいのか分からないし、やる気を失わせるような事柄も多いため、「やってみよう」という冒険

心からは遠ざかりがちである。

特に家庭を持ってしまえば、チャレンジしようという気持ちは半減するだろう。何とか無難に定年までと思ったとしても責められない。大人にそういう気持ちがあるのは理解できる。

しかし、子どもたちは、もっともっと冒険心を持って良いのではないか。どうも大人の気持ちが子どもたちにも伝染しているように感じる。

失敗を恐れるあまりか、受験でも、程々にしかチャレンジしない。学校でも失敗しないように、確実な進路を指導する。

学校カウンセリングをしていると、自分の能力に限界を引いてしまっている生徒によく会う。しかも、中学1年の段階で、もう諦めている。まだまだ、どこまで伸びるか未知なのに。

大学受験も同じである。一浪しても、行きたい大学に行くという強い気持ちを持って受験する子が少なくなっている。一浪は親に反対されているからとか、親にこれ以上迷惑を掛けられないからとか、一浪すること自体がとても悪い事のように認識されているようだ。確かに金銭面では負担を掛けるだろう。しかし、一浪することで、大きく力を付ける子どもも多い。

自分の力を早くから見限っているようでは、夢も希望もない。自分の夢を叶えようという気持ちをしっかり持って、失敗前提でチャレンジしてみてもどうか。そうすれば、おのずと道は開かれると思う。自分の力・能力と言うのは、自分が気付かないところにあたりもする。父母にも子どもたちにも、そこに気付いて

ほしい。

また「面倒くさい」と言っただけは、浮草のごとく漂って、流され放題の子どもたちも度々見かける。こうした子どもたちに、「やってみなきゃわからない！」と言うことを分からせるのはとても難しい。小さい時に持っていた夢のかけらでもあれば、コーチング手法で引出し、前向きにさせて行くことも出来よう。何とか、やる前に諦めてしまう子や、初めから「為さざる」子どもたちを減らしたいものだ。

## ＜有っても苦勞、無くても苦勞＞

*財産と子どもは、あればあるでそれ相應の苦勞があるし、なければないで苦勞するということ。*

お金があって困るなどと思わないのは、大してお金を持っていない我々の話で、お金持ちの人は何かと大変らしい。土地をたくさん持っているのに現金が無い家もある。年収何億もあるような人は、税金も多額になるだろう。豪邸に住み、スーパーカーに乗って、ブランド物の服飾で固めていても、必ずしも満たされているとは限らない。お金目当てで寄ってくる人も多いただろうし、その中から友や信頼できる人を見分けるのも大変そうだ。

お金が無くて困るという人のことは良く理解できる。生活保護を受けている人は確実な収入があるので生活に困る事は無いが、低所得世帯では、生きること、食べることそのものに支障がある。電気やガスを止め

られ、学校給食が唯一の食事という子どもたちも未だに見かける。

前述のとおり、財産の有無は必ずしも人の幸不幸に比例しない。「貧しいながらも楽しい我が家」は未だに健在だし、財産があっても不幸な家はある。

一方子どもの有る無しも、様々な影響を人に与える。

結婚しても子どもが中々出来ないと、両親・親戚・友人から「まだ出来ないの?」「もうそろそろ・・・。」などとプレッシャーを掛けられる。不妊治療に走る夫婦も多くなった。しかも治療に向かう時期が結婚後2年などと早い人もいる。高齢の場合とはかく、まだ待ってもよさそうな時期から受診する。そんなこともあるからできちゃった婚（授かり婚）が良しとされるのかもしれない。実際できちゃった婚や入籍前に妊娠しているケースは5割にもなる。

子どもがどうしてもできない場合で子どもが欲しいとなれば養子をとることも可能である。子どもがいて初めて家族としての形態が整うと言えばそうかもしれないが、夫婦だけでずっと仲良くやって居る家族もあるので、子どもがいなければいけないという考え方も堅すぎるだろう。

最近の平均的な子どもの数は2名弱だが、多産の家もある。テレビでは子どもが15人の家族の話が放送していた。子ども手当や児童手当がかなりの額になるとはいえ、一人一人にかかるお金を考えたら、それは大変だろう。食費や教育費だけでも莫大になる。

では子どもが一人か二人なら問題ないのかと言えばそうとも言えない。何人であっても、子育てと言うのは苦勞の多いもので

ある。一人の子育てで手一杯になっている母親も多々いるのだから、子どもがいるだけで苦勞ということになる。

有っても無くても苦勞なら、どっちが良いか?

要は考え方だろう。「若い時の苦勞は買ってでもせよ」とも言う。特に子育ての苦勞は、実りあるものだから、惜しまないでほしいと思う。

### < 虻蜂取らず >

欲張って二つのものを同時に手に入れようとしたために、結局はどちらも得られず失敗すること。

「二兎を追う者は一兎をもえず」も同じ意。

母親たちに「どんな子に育ててほしいか?」と尋ねると「優しい子になって欲しい」と答える方が多い。意地悪な子になって欲しくないのは当然だから、そういう気持ちは分かる。しかし少し大きくなると、自分の考えや意見を押し通せない「優しい子」の様子に、母親は「大丈夫だろうか?」と心配になる。

母親の思い通りの子になろうと、「大人しくて、優しくて、言う事を聞く子」になってきたのに、大きくなったら、「積極的で、自分の意見を言える子」を望む。子どもはどのような子になればよいのか見失うだろう。

優しい子? しっかりした子? 大人しくて親の言う事をよく聞く子? 元気な子? はきはきした子?

相反する性格を一度に持つことはできないし、親がいくら望んだとしてもその通りになるとは限らない。大人しい系になるか、元気系になるか、二つに一つ。自然に任せ、押し付けないことが大事。

英語では・・・

*Between two stool the tail goes to ground.* (二つの腰掛けの間で尻餅をつく)

*If you run after two hares, you will catch neither.* (二兎を追う者は一兎をも得ず)

### <雨垂れ石を穿つ>

どんなに小さな力でも、根気よく続けていればいつか成果が得られるということのたとえ。「石の上にも三年」も同意。

この諺は比較的よく知られており、努力を継続することの大切さを言っている。

時代が早さを求めるようになってからと言うもの、会社などでは「即戦力」が新人に求められるようになった。しかし、一つ一つの事に時間が必要な人もいるし、時間をかける必要があるものも多い。子育ては正に時間を掛けなければならない代表であろう。

日々の小さな努力が、何年も何年もかけて、卵から赤ちゃんへ、そして子どもから大人へと人を育てて行く。

子育ては失敗の連続かも知れない。絵に描いたような大きな愛で包み込んであげられるほど、親に余裕がある筈もない。子育ての成果は自立して初めてわかるようなも

ので、それまではどうなるのか分からない。母親たちが不安になるのももっともな話だ。

本当に小さな愛でも、続けて与えて行けるなら、子どもはまっすぐ育ってくれるだろう。

根気よく続けることが苦手に思える多くの子どもたちのために、大人が見本を示して行かねばならない。

英語では・・・

*Constant dripping wears away the stone.* (たえず垂れ落ちる滴は石にさえ穴をあける)

### <余り円きはまろび易し>

人間はあまり温和すぎてもいけない。どこかぎりとした所があったほうが良い。

「円き」は、円満、温和、やさしいの意。「まろび(まろぶ)」は、ころぶ、ひっくりかえる、倒れるの意。少しぐらい角がないとおもしろみにも欠けるし、人につけ込まれやすいということのたとえ。

「まろくとも一角あれや人心、余り円きはまろび易きぞ」からとられた。

子どもたちを優しい子、大人しい子に育てる保護者が多いためか、或いは保護者の目が行き届きすぎるためか、子どもたちが本当に大人しいというか覇気が無いというか……。父母に対して、心配を掛けたくないからと気を遣い、一人で悩んでいる子がいる。子ども同士でも揉め事を嫌い、相手にひたすら合わせている子がいる。そんなことを続けた子どもが、思春期後期になって急に学校不適應や

抑うつ状態などで、カウンセリングに来る。

特に思春期の反抗は、無いと困る。親に向かって「ウザイ」と言えないようでは、親を超えることはできない。親もそれに対し、「来た来た！」と受け止めること、同レベルで戦わない事が大切だ。子どもの反発を押さえつける力関係のままであれば、子どもは再び従順な状態になってしまう。そのまま大人になってしまったら、社会に出ても強いものに服従するようになるかもしれない。その強いものが良い方向に導いてくれるならまだしも、大抵服従するだけの人間はスケープゴートにされるなど、余り良い思いをしないのではないかと思う。

親や上司に対してであっても、友人に対してであっても、言うべきことは言える子に育てることが大事である。

## < 飴と鞭 >

しつけなどをする場合に、甘やかす面と厳しくする面との両方を兼ね備えていることのたとえ。また、一面では人をおだてたり利益で誘ったりし、一面では力で脅したりして人を支配することにも言う。

昔は、子育てや教育の場面でこの言葉を良く聞いたものだ。しかし最近では余り聞かなくなった。「鞭」に虐待の様な嫌な印象があるからかもしれないし、「鞭」そのものになじみが無くなったせいもあるだろう。

虐待について世間で大きく報道されるようになり、子どもを叩くことは「虐待」であると思われるようで、母親が「叩いちゃ

いけないと分かっているのに叩いてしまう。もう虐待ですよ。」と語る。

叩く親はすべて虐待なのだろうか？親だって人間であり、理性や道德だけでは制御できない時がある生き物でもある。感情に任せて怒鳴ってしまったり、何度繰り返しても言う事を聞いてくれない時に、手が出てしまったりしても責められない。一生懸命子育てをすればするほど追いつめられ、苦しくなってしまうのだ。

子育ての相談では、「殴ってはいけない」とは言うが、「絶対に叩くな」とは言わない。叩いている親に叩かないで済む方法を考えてもらう事と、何故感情的になってしまうか、子どもにイライラするのかを考えてもらう方が大切だ。そして、叩くという『鞭』の対極にある「褒めること」「認めること」「抱きしめること」等の『飴』を如何に増やすかを考えてもらっている。

また、最近の教育現場や家庭では、「飴」ばかりで「鞭」に当たるものが見られないか、体罰や虐待などの間違った「鞭」ばかりが見られることがある。

「褒める・認める」という「飴」と、「叱る・注意する」という「鞭」の量と質が問題である。バランスよく、良質なものを、適度に与えられれば、子どもは上手に躰けられるだろう。

学校でも家庭でも今一度「飴と鞭」の「量と質」を検討してもらえればと思う。

## < 雨降って地固まる >

人は雨を嫌がるものだが、雨が降ったあ

とは、かえって土地が固く締まり、よい状態になる意味から、揉め事の後、かえって良い結果や安定した状態を保てるようになることなどのたとえ。

以前よりも丈夫になる)

子育て中「雨が降る」ことは多々あるだろう。「雨」と言っても「揉め事やトラブル」などの事である。ママ友関係でも、最近ではスマホのラインでやり取りをするようで、その結果関係性がこじれることがある。高校生や中学生の問題と同じことがママ友関係でも起こっている。

高校生向けの講演で、人間関係は修復できることを度々伝えている。というのも、子どもたちが、ちょっとしたすれ違いだけで友人関係を完全に切ってしまうのを見てきたからである。

喧嘩をし、意見をぶつけ合った後、仲直りした関係は、喧嘩をする前よりずっと強くなっている。

人間は「謝ること」と「許すこと」が出来る生き物である。それが又人らしさでもある。他の動物では、勝ち負けの結果として服従か勝った方のテリトリーから去ると言う形をとるしかない。唯一人間だけが、「謝ること」「許すこと」が出来るのである。

雨はどこにでも降る。関係性がどんなにこじれたとしても、又日がさすとき、仲直りできる日は来る。「謝り」「許す」ことでより良い、より強い、そして対等な関係性を築いて欲しい。

英語では・・・

*After a storm comes a calm.* (嵐のあとに凪が来る)

*A broken bone is the stronger when it is well set.* (うまくつながれば折れた骨は